

平成30年度 重点プロジェクト事業（国際学会発表等旅費）研究成果報告
6th World Congress of Racket Sports Science における研究発表

岡村 修平*

はじめに

今回、平成30年度重点プロジェクト事業（国際学会発表等旅費）の助成を受け、6th World Congress of Racket Sport Science（以下、WCRSS 2018）における研究発表の機会をいただいたので、ここに報告する。

WCRSS について

2018年5月25～26日の日程で、タイ・バンコクの Arnoma Grand Bangkok Hotel, Thailand にて行われた WCRSS 2018に今回初めて参加した。同学会に参加したことにより、世界の Racket sport science の最先端の研究を行っている Adrian Lees 教授をはじめ、世界で活躍する様々な研究者と交流を深めることができ、かつ研究に関するアイデアをいただいたことで、自身の研究を進める大きなきっかけとなった。筆者らの進めるテニスの研究分野においては、本学会は最も重要な学会の一つであり、本学会に参加することにより racket sport に関する研究の現状を把握できるとともに、世界の racket sport 研究者とのネットワークを密にすることが可能となる。



会場の前にて元プロテニス選手のタナスガン選手と

研究発表について

Relationship Between Racket Swing and Ball Movement in Tennis Forehand Stroke – Experimental Study by Two Participants -

研究発表の内容は、トラックマン・テニス・レーダーと VICON motion analysis - system を用いて、テニスのフォアハンドストロークのスイングとボールの速度及び回転数の関係を明らかにしたものである。研究題目は「Relationship Between Racket Swing and Ball Movement in Tennis Forehand Stroke – Experimental Study by Two Participants」であった。

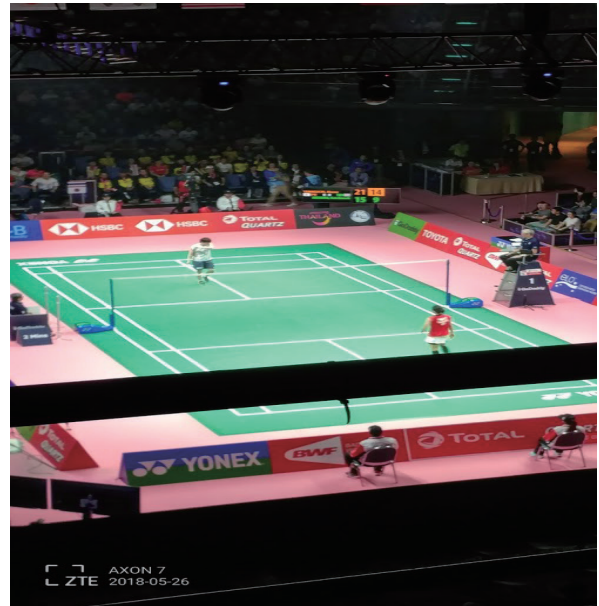
同発表は、学会1日目午後のオーラルセッションで行われた。発表時間は10分、質問時間は5分設けられた。同発表はメイン会場と少し離れたサブ会場であったため、参加者も少なくなってしまうことを危惧していたが、興味を持つ聴講者に参加いただき、幾つかの質問も受け、セッション終了後にも有意義な意見交換ができた。

発表後の質疑応答では、同発表の結論に関する質問を受けた。今回の発表では、ボール速度はラケットのスイング速度に依存すると結論付けていたが、他の要素であるラケットのスイング角度やインパクト時の面の角度は本当に関連していないのか、という質問であった。今回の研究ではそのように結論付けたが、被験者数を増やしていけば様々な要素が関わっているということが明らかになると考えている、と返答した。また、ボール速度や回転数はスイングの様々な要素がかかわっていると考えられるので、ボール速度ボール回転数に対するラケットのスイング速度や角度の寄与率を明らかにしてみてもどうか、というアドバイス

* 鹿屋体育大学大学院体育学研究科修士課程2年

を頂いた。確かに本研究は、ラケットのスイングを3つの指標に分類しており、スイングそのものを評価できていなかった。アドバイスを参考にし、1つの指標にすることができればスイングとボールの速度及び回転数の関係をよりシンプルに明らかにできると考えられる。

また、オーラルセッション終了後に、トラックマン・ユニバーシティというウェブサイトにはトラックマンに関する様々な研究や結果が掲載されているので、ぜひ確認してみてもアドバイスを頂いた。実際にそのウェブサイトを確認してみると、トラックマンは元々ゴルフで導入されたものであるためゴルフに関するデータが多く見られたが、本研究にも活用できるデータが確認できたので、それらを参考にして研究を進めていきたい。



山口茜選手（奥）



学会発表の様子

第30回世界男子バドミントン選手権（トマス杯） & 第27回世界バドミントン女子選手権（ユーパー杯）

WCRSS 2018は、世界バドミントン選手権（トマス杯&ユーパー杯）に抱き合わせて開催されていたため、バドミントンに関する研究発表を多く目にした。また、2日目午後にはユーパー杯の決勝戦の観戦が予定されており、日本対タイの決勝戦を観戦することができた。結果は山口選手、福島選手・広田選手組、奥原選手がそれぞれストレートで勝利し、日本は計3-0で世界一に輝いた。ニュースなどによれば日本の優勝は37年ぶりということで、歴史的な瞬間に立ち会うことができ、とても光栄だった。



表彰式の様子

終わりに

本学会は2年おきに開催されている。次回の開催地や日時は未定であるが、また新たな情報収集のために、同カンファレンスへの参加を計画している。Racket sportの研究をさらに進展させ、2年後の本学会にも参加できるように、今後も研究を進めていきたい。

最後に、今回このような機会を与えてくださった松下学長、その他関係者各位に厚く御礼を申し上げます。